

## ■ 編集だより

### 編集後記

私たちは日ごろの診療の中で、患者さんたちがよくなる手ごたえを実感として持っている。しかしこれを、客体化して示すことの難しさもまた、実感として感じている。学術雑誌はこうした客体化の努力を営々として積み重ねてきたわけで、その中で近年は evidence based medicine が注目され、その方法論に基づく実証研究が「科学的である」と考えられている。筆者もこうした実証研究を長年志しており、いくばくかの臨床研究を世に問うている。それでもまだ、手ごたえをすくい取れていないもどかしさがある。

エビデンスに基づく治療ガイドラインが公表され、精神医療の多義性や曖昧さを止揚するものとして、評価を受けている。治療の大枠を知るのにガイドラインは便利である。同時に、日ごろの診療の質を点検しようとするときに、ガイドラインが如何に大まかな骨格しか提示していないかを感じるし、ましてや目の前の患者さんにどのような援助をしようかと悩んだ時には、あまり役に立たないと感じる。目的地に行こうとするときに、一般的な旅行の心得や装備の案内をしてくれるガイドブックは旅の準備に役立つが、現地の詳細な地図の代わりにはならないし、実際旅を始めてしまうとあまり参照されない、という感じである。

統合失調症の心理社会的治療が専門である筆者にとって、治療の手ごたえは日々感じているのに、そのエフェクトサイズは実に心もとない。一流雑誌に載っている最新の介入研究がいずれも、エフェクトサイズが0.4前後であるのも面白い現象で、これは何か共通の原因があるのであろうか。0.4というエフェクトサイズは、厳密な方法論ののっくと結構立派な数値であるけれども、たかだか何割かの人が標準治療よりはある程度良いというレベルであって、治療者として満足できるものでは決していない。しかし統制方法を厳密にし、介入方法だけがコントロールと違うやり方をきっちり行くと、そう大きなエフェクトサイズは得られない。さまざまな援助技術の総体として初めて、よい効果が生まれるのだけれども、特定の治療技術だけ取り出すと還元主義の効果研究は、明らかに限界がある。筆者は家族心理教育の良さ、おもしろさ、そしてその効果に共鳴して、長らく日々の臨床で取り入れているが、家族心理教育の効果研究をレビューしたときに、初期の段階のほうが、又はほかに十分な治療技術のない素朴な環境のほうが、エフェクトサイズが大きくなることに気づいた。さまざまな援助システムが機能している環境に付け加えて家族心理教育を行っても、そう大きな違いは出ない。もちろん実際に援助を受けた家族の満足度は高いのだけれども、また同じ家族心理教育で、精密で時間のかかる援助と比べて短期間の介入でも同様の効果が上がる、との報告もある。薬物療法ではないが、心理社会的治療にも適切な用法や用量があるはずなのであるが、もちろんこうした問題は家族心理教育に限らない。

効果研究の持つ人工的な構造にも課題がある。多くの訓練を受けた専門家が多大な時間を費やして行う効果研究は、普段の臨床の営みとはかけ離れているし、特定の援助のみ切り出すやり方の限界については先に触れた。また効果測定についても、より特異的・限定的な効果測定は大きなエフェクトサイズが得られやすいものの、実際の診療現場の実感とはかみ合わない場合がある。

筆者が日ごろ感じている、心理社会的治療の効果測定をめぐる疑問について書いてきた。こうした日々の煩悶への適切な解はどこにあるだろうか。本誌がこうした問題提起に応える議論の場になることを、筆者は願っている。

池淵恵美